平成29・30年度

研究紀要

学校年間テーマ
「学校、家庭、地域とつながり、よりよい社会参加の実現をめざす」
～働く生活に生かせる確かな力　意欲と主体性をはぐくむ～

平成29・30年度　研究テーマ
児童生徒が主体的に学ぶ授業づくり
～「教科別の指導」と「各教科等を合わせた指導」の関連整理による教育課程の改善～

高等部生徒作品『 輝 』

平成31年3月

京都府立舞鶴支援学校

研究紀要発行に寄せて

「学校、家庭、地域とつながり、よりよい社会参加の実現をめざす」
～働く生活に生かせる確かな力　意欲と主体性を育む～

舞鶴支援学校は、今年度で 14 年目を迎えました。私達は、子どもたちが、今、そして将来、地域の人たちと関わりながら、自分らしくより豊かに、より充実した生活を送ること、そして、よりよい社会参加が実現できることをめざしています。そのために、校訓にあるように、子ども達が、「よく学び、より鍛え、そして、よりよく挑む」意欲と主体性を育み、「働く生活に生かせる確かな力」を太らせていくことが必要であると考え、年間の教育活動のテーマに掲げて、取り組んできました。

研究活動においては、平成 29 年度から２年計画で、「各教科等を合わせた指導」における「児童生徒の主体的に学ぶ授業づくり」をとおして、『教科別の指導』と『各教科等を合わせた指導』の関連整理をし、子ども達が見通しをもち、よりわかりやすい、より主体的に学ぶことができる教育課程の改善をめざし、研究を進めてきました。

授業作りの視点として、子ども達の「働く生活に生かせる確かな力　意欲や主体性を育む」ことをめざし、指導者がめざす子ども達の主体的な姿を明らかにし、「わかることをふやす」「できることをふやす」ことから、その過程であるわかりかた、できかた を吟味し、児童生徒が、自ら思考、判断して主体的に学ぶことができること、そして、生活の場に応用できるよう、ＰＤＣＡサイクルで、指導内容、指導方法を研究し、授業改善を行ってきました。

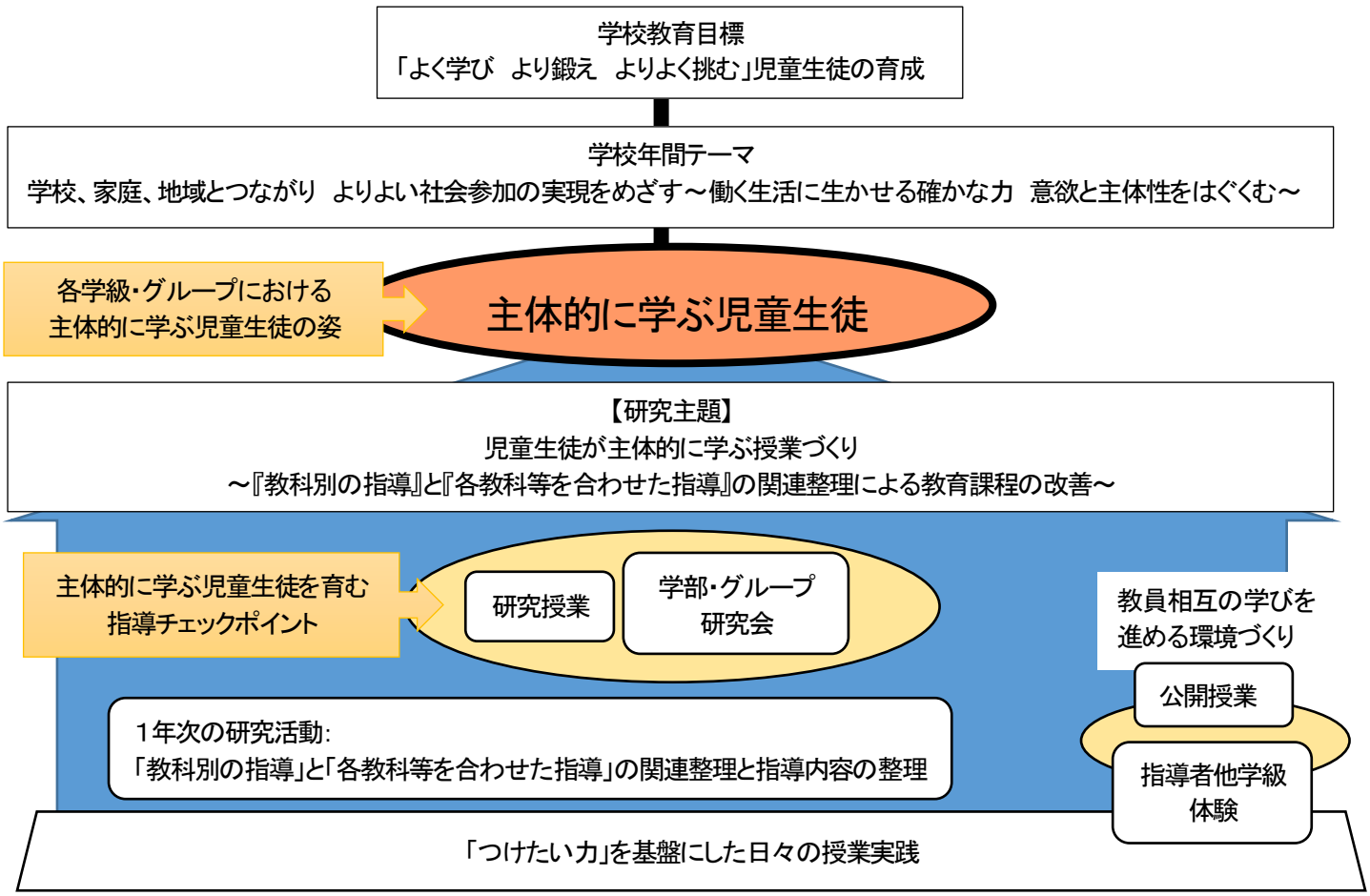
教育課程の視点からは、年間指導計画を作成し、「各教科等を合わせた指導」を中心として、教科別の指導とのつながりを明確にし、単元や題材など学習内容や時間のまとまりを見通しながら、子ども達が、より見通しをもち、わかりやすく、意欲的、主体的に学ぶことができる教育課程になるよう、検討を行ってきました。

本校の校訓である「よく学び、より鍛え、そしてよりよく挑め」は、本校のめざす子ども像であるとともに、わたしたち教員が持つべき姿勢でもあります。今後も、常に学び続け、より質の高い授業づくりや教育課程の改善に努めていきたいと思います。

ここに、今年度の実践的研究を、研究紀要として発信します。本校教育の発展のため、忌憚のない御意見をいただきますようお願いします。

校 長　　細見 恵美

H29・30 年度研究図



○ テーマ設定の理由

平成 24 年度以降、本校では、児童生徒の「生活に生きる力」「主体性を育む」ということについて、一貫した研究を行ってきた。全校で授業研究に取り組み、児童生徒の生活に生きる力や主体性を育むために必要なこととして以下のことが明らかになった。

・教材教具や指導の工夫
・児童生徒の学習活動に対するフィードバックを行うこと（児童生徒が自分自身で学習の進捗状況を確認できること）。
・児童生徒につけたい力を明確にした授業や学習活動。
・児童生徒の将来を見通し、学んだことを生活場面に広げる・生かす・つなぐ意識を持った指導を行うこと。

また、これまでに明らかになった指導上の具体的なポイントをまとめて「主体性を育む指導チェックポイント」として表にまとめた。

以上のように、主体性を育む指導については一定の成果があり、教員間でも共通のものとして認識できている。その一方で、年間を通した単元計画と、その計画に沿って行った学習の評価を行い、教育課程に反映させてその改善を図る点については課題があり、児童生徒の主体性をより伸ばしていくためにも取り組むべきことであると考えた。

また、新学習指導要領においても、児童生徒が何を学び、どのように学び、どんな資質・能力を身につけられるようにするのかを教育課程において明確にしながらカリキュラム・マネジメントをしていくことが重要であるとされている。

そこで、これまでの研究成果を踏まえた上で主体性を育む指導に関しての授業研究は継続しながら、平成 29 年度は教科別の指導と各教科等を合わせた指導の関連性を明確にするとともに各学部での課題となることに取り組み、教育課程の改善につながる授業研究を行うこととした。この場合の授業研究とは、児童生徒にどのような力をつけていきたいのかを反映させた年間指導計画及び単元配列、また、個別の指導計画の目標に基づいた授業の一つとして、学部研究会の中で教育課程に関わる協議を行うための授業という位置づけで行うこととした。

平成 30 年度には、平成 29 年度の成果と課題を踏まえ、児童生徒の主体的に学ぶ姿を「支援を受けながら自分の力を発揮しようとする姿（自分で考えて判断し行動する）」として全校で確認した。それをさらに各学部やグループ、学級の実態に応じて「目指す児童生徒の主体的に学ぶ姿」として具体的にしていく作業を行い、その姿を目指した研究授業や日々の実践に取り組むこととした。

○ 研究目的

①	各学部における教育課程上の課題を明らかにし、教科別の指導と各教科等を合わせた指導との関連を整理する。
②	平成 29 年度における各学部の研究成果を基に教育課程上の改善を図りつつ、主体的に学ぶ児童生徒を育む指導についての授業研究に取り組む。

○ 研究仮説

①	教科別の指導と各教科等を合わせた指導との関連を整理することで、学習内容に関連性を持たせることができるだろう。
②	学習内容に関連性を持たせたことにより、児童生徒がより自分の力を発揮したり主体的に学ぶ姿を身につけたりすることができるだろう（主体的に学ぶことができるだろう）。
③	児童生徒の学びに合った教育課程の改善につながるだろう。

○ 各学部の研究活動

小学部

1　研究目的

小学部の現状として、各教科等を合わせた指導の学習内容を充実させるということが挙げられる。児童が教科別の指導で学んだことを各教科等を合わせた指導の中で積極的に生かし、意欲的・主体的に学習できるようにしたいと考え、以下の目的を設定した。

①	「教科別の指導」と「各教科等を合わせた指導」の関連整理をする。
②	児童がより主体的に学ぶための授業づくりを行う。
③	年間指導計画を作成し、実践内容に応じて検証することで、より子どもの実態に合った実践や主体的な児童の姿を引き出すための手立てを考察する。

2　研究仮説

①	「教科別の指導」と「各教科等を合わせた指導」の関連整理をすることで、つながりを明確にして、授業間や単元間・教科間でつながりを持たせた授業づくりができるのではないか。
②	教科別の指導と各教科等を合わせた指導を関連させた今年度の年間指導計画を基に授業を組み立てたり、主体的な姿や教師の意図等を協議したりすることで児童の主体的な姿を引き出す授業づくりができるのではないか。

3　研究の経過

①　各教科等の単元計画や関連について（平成 29 年度）

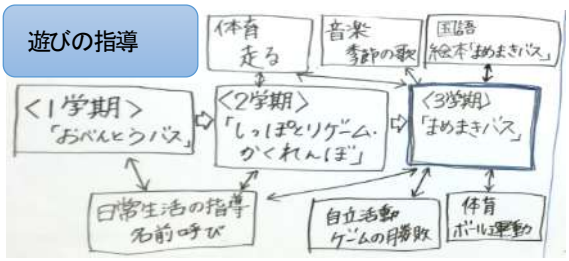
①　単元関連表　※一部抜粋

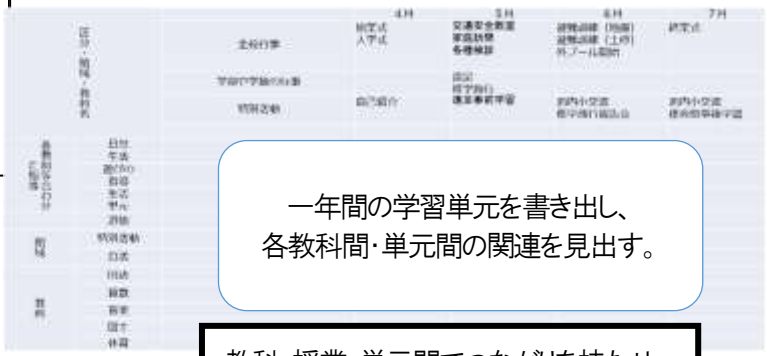
	4月	5月	6月	7月
遊びの指導	**友達と仲良くなろう** （国語）①ゲームのルールを読む （道徳）自己肯定感と他者理解 （自活）ペアで手をつないで走る （算数）点数を数える **草花・生き物と遊ぼう** （図工）①押し花作り②生き物の絵 （生単）①草笛作り②ザリガニの釣り方 ③山ごぼうで色水遊び （自活）①草・生き物のにおい （道徳）①生命の尊重 **感触遊び** （自活）①道具の扱い方②新聞やぶり ③着替え （算数）①回数や形 （国語）①絵本の読み聞かせ	**水遊び** （自活）①体調管理に②身体の清潔 ③ルールを守る④着替え⑤顔洗い⑥歩行練習 （図工）①おもちゃ作り （体育）①浮島・バランス②準備体操 （国語）①絵本 （算数）①ボールや碁石の数を数える **七夕・雨のおはなし遊び** （国語）①読み聞かせ②紙芝居作り ③文字④台詞を覚える （図工）①紙芝居の絵を描く②飾り作り （算数）①星を数える②形 （遊び）①光遊び②雨音遊び （音楽）①歌 **室内ゲーム（ボードゲーム・トランプ**		

教科別の指導と各教科等を合わせた指導の関連整理をすることで、つながりを明確にして、授業間や単元間・教科間でつながりを持たせた授業づくりについて考えることができた。

平成 30 年度は、その内容を踏まえて児童がより主体的に学ぶための授業づくりを研究することとした。

②「教科別の指導」と「各教科等を合わせた指導」の関連整理





一年間の学習単元を書き出し、各教科間・単元間の関連を見出す。

教科・授業・単元間でつながりを持たせた授業作りを考えることができた。

より主体的に学ぶ児童を育むために、教科間や単元間等、学びの内容に関連を持たせた H30 年度の年間指導計画の作成につなげた。

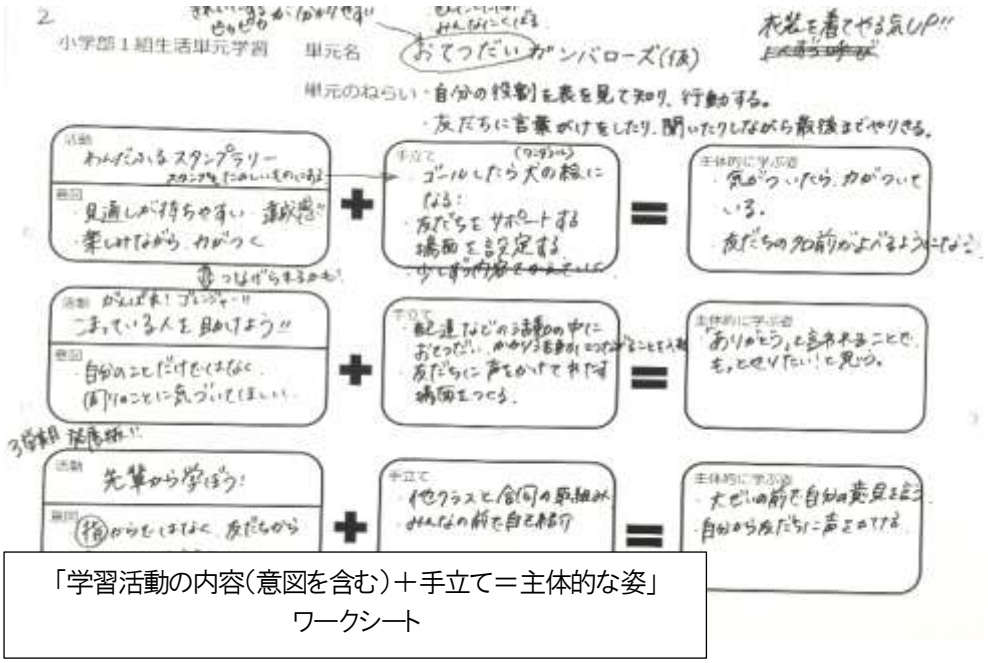
② 主体的に学ぶ児童の姿

児童が主体的に学ぶための授業づくりを研究するにあたり、各学級における主体的な姿を協議し明確にした上で指導にあたるようにした。

主体的な姿の例 （知的障害学級・低中学年）	指導者のそばに来て、やりたい気持ちを言葉やサイン、表情で伝える。

③ 授業づくり

学部全体で、児童が主体的に学ぶ授業づくりに取り組んだ。各教科等を合わせた指導を研究授業に定め、月 1 回の学部研究会で研究授業の事前・事後研を行い、学部全体で児童の主体的な姿を引き出す方法について考えた。

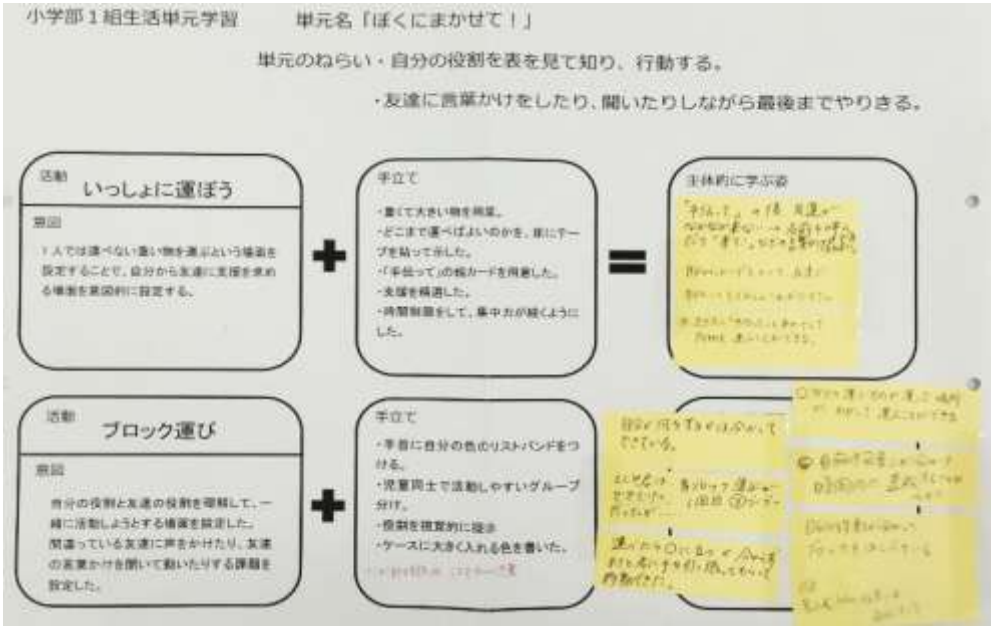


「学習活動の内容（意図を含む）＋手立て＝主体的な姿」
ワークシート

【事前研】

事前研では、単元のねらいや計画を基に具体的な学習活動の内容と手立てを併せて考え、その結果どのような「主体的に学ぶ姿」につながるのかを小グループで協議した。

また手立てを考える中で、主体的な姿を引き出すためのより具体的な指導者の言葉かけや動き、教材についても協議した。



【事後研】

児童の主体的に学ぶ姿を具体的に書き出し、その姿を引き出した手立てについて協議した。さらに、より発展した学習になるための手立てや学習活動について意見を出し合った。

4 成果と課題

成果	・各学級で児童の主体的な姿について協議し確認することができた。 ・学部として授業づくりに取り組むことができた。 ・授業者が考える活動内容に対して主体的な姿を引き出すためのよりよい手立てについて意見を出し合い、共有することができた。 ・授業で見られた児童の主体的な姿を評価し検証することができた。 ・学級の授業実践や学級経営における成果や課題、今後の計画を担任間で交流したり見直したりすることができた。
課題	・2年間の研究活動のゴールを的確に示すことが難しく、見通しのある研究を進めることができなかった。

中学部

1　研究目的

中学部の課題として、教職員の異動に伴い指導を引き継ぐことの難しさや、学部や学級における各教科等のねらいの明確化がある。そのため、まずは「主体的な学び」「各教科等を合わせた指導」について全員で学習し、共通認識を図った上で、下記の研究活動を通して、課題についての検討を行った。

①	各教科等を合わせた指導の単元計画や関連についての検討
②	「主体的に学ぶ姿」についての協議
③	学習指導上の悩み相談とそれに基づく研究授業
④	学習指導案のファイリングと活用

2　研究仮説

年間指導計画とも関連させながら、「主体的な生徒の姿」とはどういうものかを共通確認し、学部全体で必要な支援や授業内容について考えながら研究授業に取り組むことで生徒が主体的に学ぶ授業づくりができるのではないか。

3　研究の経過

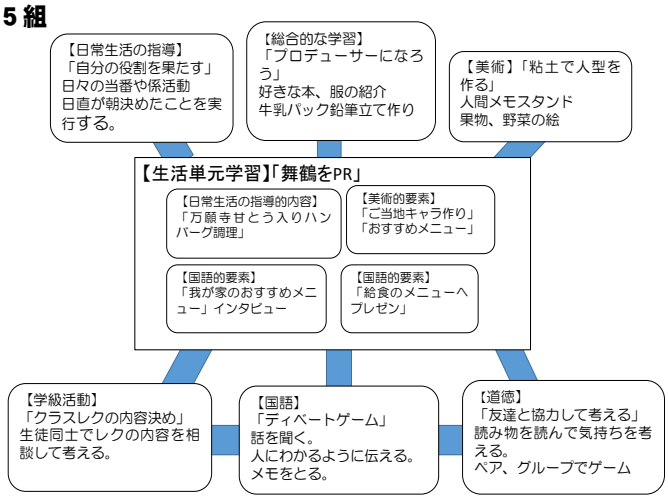
①　各教科等の単元計画や関連について

H29 年度は、学級毎に生活単元学習について「単元の中に含まれている教科の要素」と「各教科等とのつながり」を図示した。

生活単元学習と各教科等との関連を図示するだけでなく、さらに生活単元学習に含まれる教科的な要素を書き出すことで、そのつながりをより明確にすることができた。単元を計画する段階で各教科等との関連を十分に検討する必要があることを確認した。

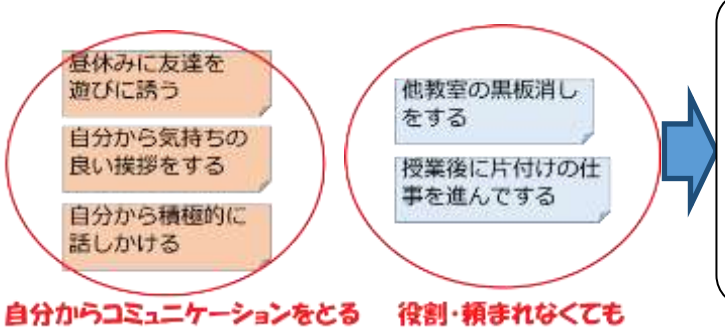
H30 年度は、年間指導計画表を用い、各教科等の指導において生活単元学習と関連づけられ、指導ができているかについて学期末ごとに確認と見直しを行った。昨年度の成果を踏まえ、それぞれの学習において、いつ、どんな力をつける必要があるのかを考えながら改善していくことができた。

中５組



②　主体的に学ぶ生徒の姿

学級ごとに代表生徒1名の学習や日常生活における主体的な姿を挙げ、カテゴリーに分類してキーワードを探した。それらを基に学級ごとに生徒の主体的に学ぶ姿をまとめた。この主体的に学ぶ姿を共通認識しながら、指導にあたるようにした。



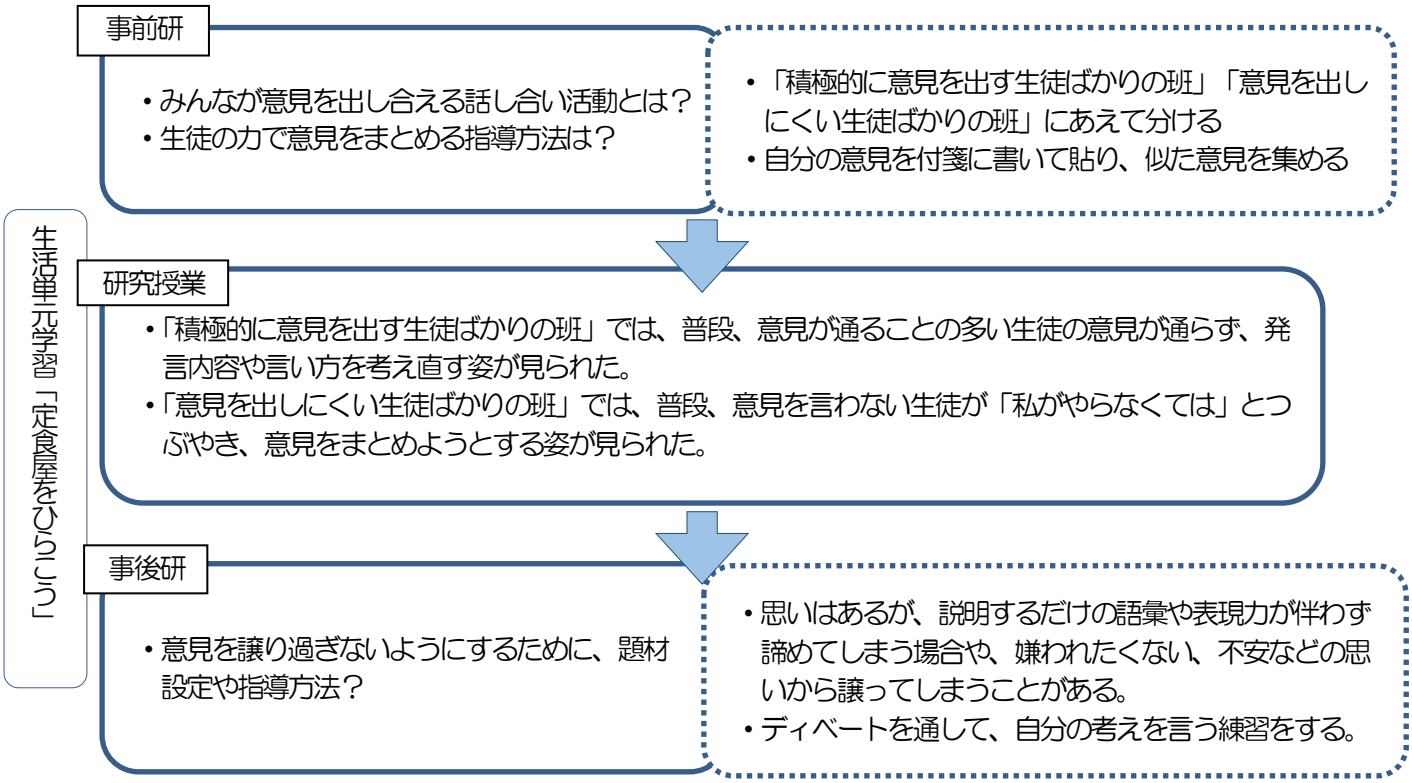
- 相手のことを考えて、自分からコミュニケーションをとることができる。
- 責任を持って、自分の役割を果たす。
- 学ぼうと意欲を持つ。意欲的に学習に取り組み、学んだことを生活に生かす。
- 自ら考えて、状況判断や選択をする。
- 思いや考えを積極的に発信する。

③ 授業づくり

H29 年度は、日々の学習指導における悩みについてアンケートを取り、それを基にグループで話し合い、単元計画や授業案を作成した。生徒につけたい力を考え、授業づくりを進めた。

H30 年度は、生活単元学習の研究授業を行った。研究授業の事前研と事後研において、授業者の悩みについてグループで話し合った。その話し合いでは、生徒が主体的に学ぶ授業となるよう、学部で共通認識している各学級の「生徒の主体的な姿」を基に学習内容や手立て等について話し合いを深めた。

その結果、事前研での意見を参考に授業作りを行い、生徒の普段とは違う主体的な姿が見られた。



4 成果と課題

成果	・最初に「各教科等を合わせた指導」「生活単元学習」についての基礎的な学習をすることで全員が前提となるものを同じにして話し合いを進めることができた。 ・「各教科等を合わせた指導」と各教科等とのつながりを意識して指導にあたることができた。 ・学部として、学級の生徒の「主体的な姿」について共通認識をもつことができ、イメージしながら授業づくりができた。 ・学部として、授業研究を進める中で「指導者の支援がなくても自分から手順書を見て活動する」、「授業の準備や片付けを進んで行う」「様々な経験を重ね、成功体験を積み上げることで自信を持って活動に向かうことができる」など、主体的に学ぶ生徒の姿が見られるようになった。
課題	・国語、数学などを個別学習で取り組んでいる場合、「各教科等を合わせた指導」とのつながりに個人差があり、不十分な場合もあった。 ・生活単元学習を一定期間、集中的に取り組む方が良いのか、帯状に取り組む方が良いのかについては実態に応じて検討していく必要がある。 ・ファイリングした過去の指導案を指導の引継ぎに役立てることはできたが、誰もが見やすく、かさばらない保存の仕方については今後の課題である。

高等部　研究活動について

Aグループ	B1、B2グループ	Cグループ	職業自立
表情や身ぶりで意思疎通する発達の段階	話し言葉を習得したり豊かにしたりする発達の段階	書き言葉を習得する発達の段階	書き言葉によって思考できる発達の段階

平成30年度は合同で研究活動を行った。

平成29年度(1年次)

学部の現状 (研究活動設定理由)	・生徒自身に「何のためにこの学習をしているのか」目的を明らかにしたり、行事や取組と日々の学習(各教科や合わせた指導)を関連させて指導したりすることが重要。 ・個別の指導計画はあるが、学習内容や単元ごとの指導記録が正式にはないため指導内容が積み上がりにくい(教科担当者が4月に悩む)。 ・3年サイクルの指導内容表ができると良い。
学部の重点研究目的	①　年間指導計画(学級・グループごと)を見直し、新たに作成する。 ②　各単元計画(記録)を書き残す。

平成30年度(2年次)

学部の現状 (研究活動設定理由)	・一年次には、各グループ単位で年間指導計画の見直しや教育課程の整理を部分的ではあるが行うことができた。単元計画表や指導内容表、題材案等を残し、指導内容・指導学年や指導時期の検討等が具体的に確認できたことは、「何をいつ教えるか」が明確となり、生徒自身にも「何を学ぶのか」がわかり、教育内容が積み上がることにつながる。 ・進路学習に関する指導内容を整理する協議の中で、他教科との連携した指導や日常生活への般化の大切さを確認した。本校教育課程編成上の方針(6)では、「(前略)『生産・流通・販売』の一貫した作業学習について、新製品の開発や新たな作業種の導入など特色ある作業学習の充実を図る。」と明記し、作業学習の時間数を多く設定し年間を通して各種販売会を行っている。本校は「質の高い製品作り」を追求してきた経緯があるが、生徒の主体性をさらに伸ばすための作業学習のあり方が問われてもいる。 ・学部経営方針「進路希望の実現に向け、働く意欲、態度、スキルを身につける。」に則り、研究主題「高等部生徒が主体的に学ぶ授業作り」を進めるには、作業学習や販売会　のあり方について協議し改善することが活動の根幹になると考えた。また、A段階の生徒は「多様な集団の中で、集団の一員としての意識や自覚を育てる。」ことを生活単元学習の授業づくりの中で協議し改善していきたいと考えた。
学部の重点研究目的	①　生徒が主体的に学ぶ生活単元学習、作業学習について、授業研究を進めながら、よりよいあり方(指導内容、指導方法)について明らかにする。
研究仮説	・教育課程ごとの生徒の指導目標に応じた「各教科等を合わせた指導における生徒が主体的に学ぶ授業」について協議し授業研究を進めることで、自立と社会参加に向けた高等部の授業のあり方が明確になるのではないか。

Aグループ

1　研究目的

【H29】

①	単元計画表を活用し、訪問学級、分教室、通学籍学級の指導内容を交流する。
②	生活単元学習と、他の教科・日常生活の指導・自立活動等との関連を協議する。

【H30】

①	昨年度の研究成果を踏まえ、「生徒が主体的に学ぶ生活単元学習」について考え実践することで、目指す生徒像に到達できる教育につなげる。
②	A段階生徒の集団保障の視点での、合同で取り組む生活単元学習について考えることで、行事を節目にした実践を深める。

2　研究仮説

【H29】

①	3学級の指導形態が訪問教室生・分教室生・通学生と違うことから、その指導内容を交流することで指導内容を確認し合い、次年度に実施できる年間行事及び単元計画表を作成できるのではないか。
②	生活単元学習と他教科や行事との関連を協議することで、より生徒の実態に合った指導内容の設定を意識した実践を積み上げていくことができるのではないか。

【H30】

①	日々の生活単元学習の授業内容と、行事（合同学習・文化祭）を節目にした生活単元学習の取組方を協議することで、生徒が主体的に学ぶ授業づくりをすすめることができるのではないか。

3　研究の経過

①　H29 研究実践

単元計画

教科・領域　　中心指導者

組　グループ　　単元名

（1）単元の目標

観点　　単元の目標（集団全体　・　1～2項目）

自立につながる知識・技能

主体的な学び

（2）指導計画（期間　　～　　）

指導内容　　計画時数　　教材・教具等　　実時数

（3）手だて・配慮点（全体／特に配慮が必要な生徒）

（4）生徒の評価　（◎：良好　○：おおむね良好　△：継続指導が必要）

生徒名　　個人目標の重点ポイント　　知識　　技能　　特別な支援など

（5）指導のふりかえり　　指導の評価　A：良好　B：おおむね良好　C：やや不十分　D：不十分　　授業改善　　手立て

年間行事及び単元計画表（抜粋）

（1）　単元計画表を用いた指導内容の交流

　単元計画表を作成し交流することで、大事にしている点を押さえたり、他学級の様子を理解できるようにしたりした。

（2）　生活単元学習と他の学習内容との関連

　生活単元学習と他の学習内容との関連を協議する際には、「各教科等を合わせた指導分析シート」「年間行事及び単元計画表」を用いた。

その結果、以下のことが成果となった。

・年間指導計画の見直し（記録）

・単元計画表（記録）11 単元を書き残した。

**　→授業の交流・アイデアが出し合えた！**

・教育課程Aグループの生徒の主体性について共通確認できた。

A グループ生徒の主体性

役割を果たす

選ぶ→伝える→「わかってもらえた！」と感じること

表情・発声で意思表示を行う　等

それを引き出すための教員の臨機応変な TT 連携

② H30 研究実践

(1)生活単元学習の授業研究

研究授業及び公開授業を通して、A グループとして確認した「生徒の主体性」が引き出せたかどうかを検証し、授業の振り返りを行った。

【生活単元学習の学習内容】

紙すき	名刺作り・プレゼントカードづくり 等	研究授業
美術的内容	七夕飾り・クリスマス飾り・折り染め・お好み焼き作り	
調理(家庭)	お菓子作り・家族へのレシピ作り	
お話(国語)	さんびきやぎのがらがらどん・ランパンパン	公開授業
体験学習	買い物学習・発表会をしよう・パン屋さんをしよう・施設体験	
からだ(自立活動的な内容)	からだづくり・校外校内散策	
行事	体育祭に向けて(練り歩き)、文化祭に向けて(スイッチ操作)	

生徒が主体的に学べるための工夫点として、全ての単元に音楽を取り入れて活動に見通しを持ちやすくしていることや楽しいと思える活動、わかりやすい体験活動、自信をもってできる活動を設定していることが明らかになった。

＊訪問学級は、生徒の実態に応じて教科的な学習を充実させていった。

(2)各授業で大切にしたい点

・生徒のやりたい気持ちを引き出すための教材(得意なこと・好きなこと・楽しいこと)を準備すること。
・生徒に選択の機会を設けること。
・繰り返し取り組むこと。
・いろいろな友達の姿、多様な集団の中で活動すること。
・教員の待つ姿勢。
・基礎的な内容を丁寧に指導すること。
・生徒に対するアセスメントの共有と個に応じた支援をすること。
・一日を通して生徒が最も頑張りたい所に重点を置くこと。

人との関わりの基盤　一人一人が大事にされているという安心感

(3)生徒が主体的に学ぶ姿

主体的に学ぶ姿 **「人との関わりを基盤にする中で、自分の力を出し、更なる活動へとつながる姿」**

A グループ生徒の実態から他者と積極的に関わることが課題である。だが、表面上はわかりにくいが他者と関わりたい気持ちも強く持っていることがわかった。

緊張と緩和(活動と休養)のバランスをとるのが難しかったり、一緒に学習する友達が少ないという特有の困難さもあったりするが、活動後の達成感や満足感が生徒の自信となり、「次も頑張ろう。」「友達と一緒だと楽しい。」「もっとしたい。」「○○のために頑張る。」等の思いが芽生えて「主体的に学ぶ姿」へとつながっていく。

4 成果と課題

成果	・年間指導計画を見直し、記録に残すことができた。 ・単元計画表 11 単元を書き残した(授業交流・アイデアが出し合えた)。 ・生徒の主体的に学ぶ姿について協議し、共通確認することができた。 ・各学級の生徒の実態に合わせて単元を設定したり生徒へのアプローチを深めていったりすることができ、生徒の主体的に学ぶ姿を引き出すことができた。
課題	・生活年齢と発達年齢のギャップについて、生徒にわかりやすい意欲につながる学習を作ることが大切である。 ・A グループの生徒にとってはじっくりと取り組むことが大切で、何を題材に取り組むかが重要である。

Bグループ

1　研究目的

高等部Bグループの課題として、①「職業」「家庭」「作業学習」にかかわる学習の指導内容や扱う教科のすみ分けが曖昧であること②「進路学習」を年間単元計画に位置付ける必要があること③B1B2合同で取り組んでいる「総合的な学習の時間」の内容と取組に検討が必要である、の3点が挙げられた。よって以下を目的とした。

【H29】

①	「生活単元学習」「総合的な学習」「職業」「家庭」と他の教科との関連について検討し、指導内容を整理する。
②	具体的な単元設定を行い、「年間行事及び単元計画表」を作成する。
③	単元計画表を活用して授業(指導内容)を交流する。

【H30】

①	「生徒が主体的に取り組める販売会の在り方」を検討する。
②	検討した内容について授業や校内販売会で実践を行う。
③	校内販売会の成果を西市民プラザ販売会での実践につなげ、校外の販売会で生徒の主体性を引き出すために有効な手立てを探る。

2　研究仮説

【H29】

①	「生活単元学習」「総合的な学習」「職業」「家庭」と他の教科との関連について検討したり指導内容を整理したりすることにより、生徒たちが何のために学んでいるのかがわかりやすくなり、主体的に学ぶ授業づくりにつながるのではないか。
②	年間を見通した、より具体的な年間単元計画表を作成することにより、学期ごとの行事・取り組みに関連した指導が行いやすくなるのではないか。
③	単元計画表を活用して授業(指導内容)を交流することにより、教員一人一人の指導力向上につながるだろう。

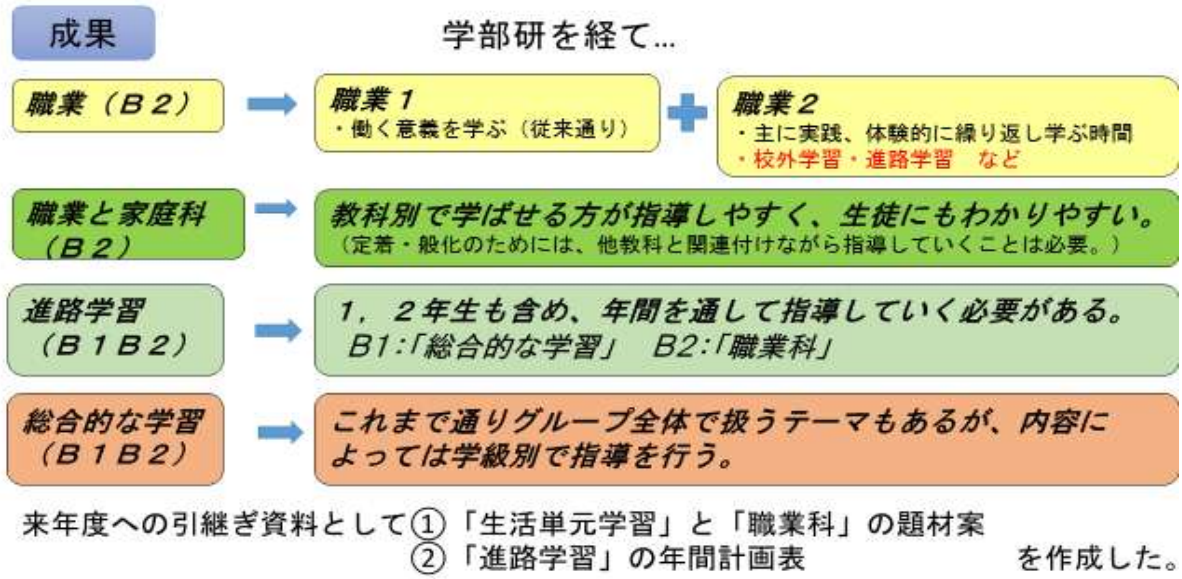
【H30】

①	校内販売会を設定し実践を行うことで、生徒の実態に合った販売学習を経験させることができ、一人一人の働く意欲(主体性)が高まるのではないか。
②	販売活動自体への見通しや理解が進むことで、校外での販売活動で求められるスキルの習熟が促されるのではないか。

3　研究の経過

①　H29 研究実践

・「職業」「総合的な学習」「生活単元学習」の指導内容を挙げる。
・「職業」と「家庭科」の内容について、合わせた指導がよいか教科別がよいかについての検討
・「進路学習」についての検討(年間計画の作成)
・「総合的な学習」についての整理



来年度への引継ぎ資料として①「生活単元学習」と「職業科」の題材案
②「進路学習」の年間計画表　を作成した。

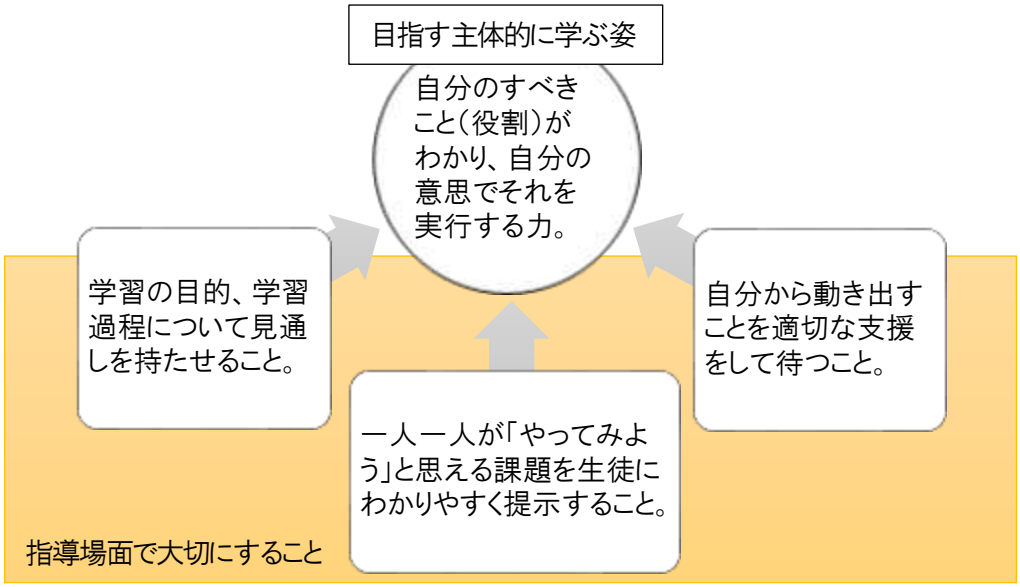
② H30 研究実践

(1)主体的に学ぶ生徒の姿について

「生徒が主体的に学ぶ授業づくり」を進めるにあたり、本グループの考える生徒の主体的な姿について検討を行った。年度当初は、Bグループ全体としては**「自分にとってよい方を選んで行動する力」**をグループの考える主体的な姿とした。

しかし、販売会を中心とした取り組みを進めていく中で、生徒たちが生き生きと販売活動を行う姿が見られ、自分から進んで友達に言葉かけをしたり、友達のよい姿を知って自分も改善しようとしたりといった行動が増え、目指す姿としてよりよい表現があるのではないかという意見が出された。

そこで1・2月のグループ研究会の中で再度検討を行い、最終的に下記のようにまとめた。



(2) 作業学習の授業研究

今年度より生徒全員が地域とのつながりを意識し、生産から販売までを通して経験することができるように、週1回、従来は別であったB1段階とB2段階の学級が合同で作業学習を行うこととした。合同で行ったことでの良さと課題について、研究会の中で確認する機会を持った。

良かった点(抜粋)

・B1の生徒が経験できる作業種が増えた。
・普段から合同で学習しているので、販売会への取り組みがスムーズだった。
・B2の生徒がB1の生徒の手本となってリードしようとする姿が見られた。

課題(抜粋)

・分野に分かれての作業になり、実態の幅が広がるため、学級で取り組む時ほど支援が行き届かないことがある(特にB1)。
・曜日によって作業人数が変わるので、学習として目標を設定する時に指導者の年間の見通しが持ち辛い。

研究授業

作業学習「校内販売会を成功させよう」

○ 主体性を引き出すための工夫
＊ペアによる販売活動
(役割の明確化)
＊アンケートコーナーの設置
＊生徒が主導する練習場面の設定

成果
・「会計担当」「商品担当」とペアで接客をする方法を取ったことで、やることが明確になった。
・アンケートコーナーで自分からお客さんに関わる機会を持つことで、販売への意欲がさらに高まった。
・8大用語の発声練習で生徒が順番に先導役を務めることにより、「自分たちでやるんだ」という意識が高まった。

課題
・校外での販売会でもペア活動が可能か。
・金額の計算で電卓を使用したが、西市民プラザ販売会ではどうするか。

西市民プラザ販売会　2 月 21 日

成果

- 校内販売会を経験したことにより、自分たちでやるんだという意識が初回の練習から見られ、スムーズだった。
- 限られた学習の中で手順表を見ずに接客できるようになった生徒も多くあり、習得が進んでいるのがわかった。

課題

- 校外での販売会はお客さんの大半が知らない方で、校内販売会との違いは大きい。このギャップが埋められるような中間的な取組ができるとよい。
- 指導者間に販売会経験の差があるため、学習を進めていく時に知っている指導者に負担がかかりがちであった。指導者の経験・知識をどのように引き継ぐのかを検討すべき。

4　成果と課題

成果	・1年次に教科における指導内容の整理を行い、教育課程の改善につなげることができた（職業科の時間増、家庭科の内容の明確化）。 ・1年次に単元計画表や年間単元計画表を作成したことで、2年次の指導に生かすことができた（生活単元学習・職業・総合的な学習）。 ・2年次に作業学習の「製品販売会」に特化して研究を行うことで、指導者間で作業学習について話し合いが進められ、学習環境の設定や指導支援について理解が深まり、生徒の力を伸ばすことができた。 ・主体的な姿について共通のイメージを持って、チームとして指導できるようになったことで、生徒たちが販売会に向けての1回1回の練習に意欲的に取り組めた。そしてその意欲が当日の主体的な販売活動につなげることができた。 ・目指していくべき「主体的な生徒の姿」を明確にして共通理解をしておくことで、グループとしての取り組みの中で、それぞれに応じた力をつけ、発揮することができた。 ・校内販売会で生徒自身が達成感を感じることができ、それを西市民プラザ製品販売会への取組につながった。練習の目的がわかって、初回から意欲的に取り組む姿が見られた。 ・校内販売会を経験することで、販売会が未経験の指導者も見通しをもって取組が進められた。

C・職業自立グループ

1　研究目的

高等部C･職業自立グループとして、以下を目的とした。

【H29】

①	職業科の指導内容を整理し、職業科と他教科との関連性、すみ分けについて検討する。
②	学年別の基本的な「年間行事及び単元計画」を作成する。
③	主要となる単元計画表を作成し、授業交流をする。

【H30】

①	「生徒が主体的に学ぶ作業学習のあり方」について、C･職業自立グループ合同で検討する。
②	検討したことを実践に生かし、作業学習のよりよい授業づくりを行う。

2　研究仮説

【H29】

①	職業科と他教科との関連性やすみ分けについて検討することで、生徒自身が「何のためにこの学習をしているのか」がわかったり行事や取り組みと日々の授業を関連させて授業が行えたりするのではないか。
②	3年間を見通した「年間単元計画」を作成することで、指導者も見通しを持って授業づくりができ、より積み上げのある指導をすることができるのではないか。

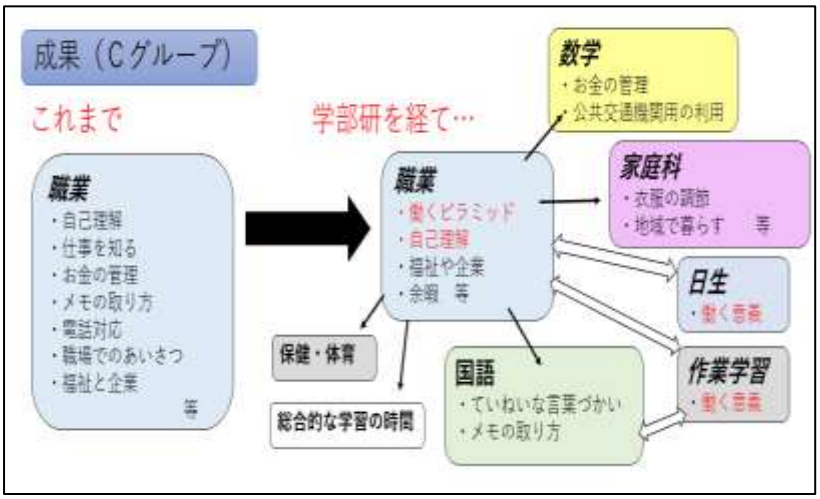
【H30】

①	生徒自身が考える間(ま)の確保、わかって動ける手立て、生徒が達成感を得られる指導等のポイントを検討することで、生徒がより主体的に取り組む作業学習を作ることができるのではないか。

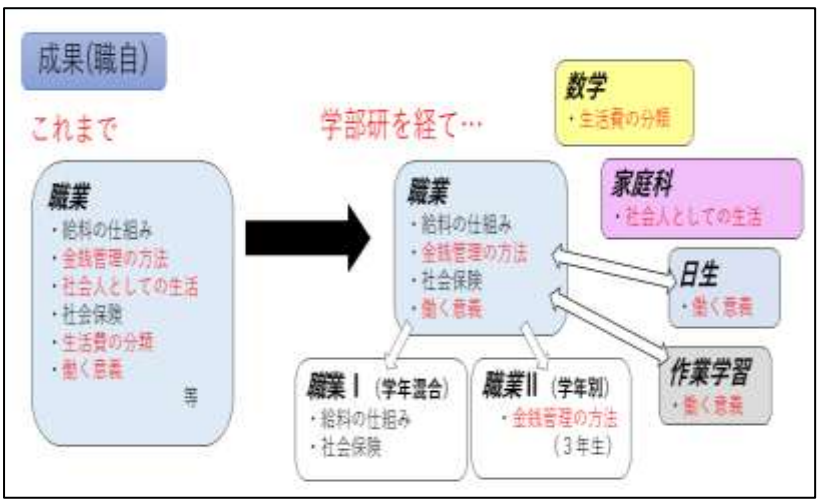
3　研究の経過

①　H29 研究実践

(1)職業科と他教科との関連性やすみ分けについて



・職業科(＋他教科)の指導内容の整理
・効果的な指導学年･指導時期の検討
・進路学習の土台を、個々の課題に沿った「働くピラミッド」作りとすることを確認
・他教科との連携や日常生活への般化の大切さについて確認



・職業科(＋他教科)の指導内容の整理
・効果的な学習集団、指導時期の検討
・他教科との連携や日常生活への般化の大切さについて確認

これを受けてH30 年間指導計画を作成し、それに基づいて授業を実施することができた。

② H30研究実践

(1)主体的に学ぶ生徒の姿

やるべきことがわかって自分から行動する姿 と確認した。

(2)作業学習の授業研究

◇研究授業:「藍の栽培」

・ねらい:グループ活動と各個人の役割を設定し、生徒同士で協力し、責任感を持って取り組む。

・成果 :役割の設定、グループ活動の設定の効果を確認するとともに、なんのためにこの作業をするのか、どう取り組んだかを生徒に実感させることの重要性も確認された。

◇「主体的に学ぶ生徒を育むためのチェックリスト」の導入

授業研究での成果・課題を受けて、ポイントをチェックしながら作業学習の授業内で見られた生徒の主体的な姿を記入していった。チェックリストをもとに、各作業種で共通する**「主体的に学ぶ生徒の姿(やるべきことがわかって自分から行動する姿)」**を引き出すために重要なポイントを検討した。

◇各作業種に共通する、主体的な姿を引き出す授業づくりのためのポイントの確認・検証

【ポイント1】

すぐに支援せず待つ、見守る。すべてを最初から言わず、生徒が考える間を与える(環境設定)。

・自分でじっくりと製品の良し悪しを見てから報告するようになった。
・自分の担当以外にも友達の担当を手伝おうとする、ペアの友達に聞きに行く姿が見られるようになった。 等

【ポイント2】

何のために今この作業をしているのか、何につながるのか生徒が実感できる。

・何をすべきかわかって活動し、責任を持って取り組む姿が見られた。
・活動に見通しが持て、予想を立てることができた。 等

【ポイント3】

意図的に生徒同士が協力する場面を設定する。

・わからないことを聞いたり教え合ったりする姿が増えた。
・言葉をかけ合い、自分だけでなく周りを見て助け合う姿が見られた。 等

【ポイント4】

ICT の使用

・言葉だけでは理解しにくい生徒は、画像で確認できたため理解が深まった。
・自分たちで製品の PR 文や構図を考える等、生き生きと活動する姿が見られた。 等

これらの結果から1～4のポイントは、**生徒の主体的に学ぶ姿(やるべきことがわかって自分から行動する姿)**を引き出すために重要なポイントであるということが検証でき、引き続きこれらのポイントを意識しながら授業づくりを進めていくことをグループ内で共通確認した。

◇さらに生徒の主体的に学ぶ姿を引き出すために重視する視点として、協議の中で挙げられた視点。

・学期によって重視する身に付けさせたい力は変わるという視点。
・各学年によって生徒が感じる作業学習の意義は異なるという視点。
・「自分たちが作ったもの」「自分だったらどうするか」という視点。→製品の貸し出しを行い、購入者(教員等)へのアンケート実施→改善につなげる。
・販売会以外の、短いスパンでの販売や受注(校内販売など)を増やす。
・ICT の活用として、製品をとって販売会のスライドショーにする、在庫チェックアプリを利用し、生徒が使いこなす等。

4　成果と課題

成果	・1年次に年間単元計画表を作成したことによって、指導時期と指導内容が明確になり2年次の実践をより計画的に行うことができた。（特に職業科） ・研究を進めるにあたり、各作業分野での悩みや思い、大切にしていることを交流する機会を持つことができた。（T1、T2の立場含む） ・「主体的に学ぶ生徒を育むためのチェックシート」を活用し、特にC・Dグループにおいて共通する重要なポイント4点を挙げることができた。 ・重要なポイント4点を元に具体的な指導場面を設定し、主体的な生徒の姿を引き出すことが検証でき、今後につながる実例を示すことができた。 ・各作業分野の実践を交流することによって、よい点を取り入れながらそれぞれの指導に生かすことができた。
課題	・年間指導計画では、Cグループでは職業科の進路学習（特に働くピラミッド）への取り組み方について、職自グループでは、各教科で取り扱う指導内容の時期をリンクさせていくことが課題としてあげられた。

【資料】

主体的に学ぶ児童生徒を育む指導　チェックポイント

T1	児童生徒の興味・関心を引き出す題材を設定する。
	授業のめあてを明確にする。
	児童生徒が活動しやすい雰囲気づくりを考える。
	児童生徒に考えさせる場面と時間を設定する。
	わかりやすい言葉で具体的に指示をする。
	教えてほめる。
	全体を把握できる立ち位置で指導する。
TT	児童生徒が考える際の連携、支援の仕方を共通確認する。
	T1とT2以降の教員の役割を分担する。
	児童生徒が活動に集中できる立ち位置で支援を行う。
	教師の支援を意図的に減らすことをイメージする。
学習形態	児童生徒同士で関わる、協力するペアやグループ活動を設定する。
	児童生徒が意欲を持てるような役割や活動を与える。
	児童生徒が活動しやすい、実態に合った教材・支援グッズを準備する。
	児童生徒の実態や学びやすさ等、必要に応じてICT・AT機器を活用する。
	机の位置や教師の立ち位置を児童生徒たちが活動しやすいものにする。

○ 公開授業

1　目的

・公開授業及び事後研にて参観者と授業者が協議することを通して授業力の向上を図ること。

・特別支援学校教員に求められる指導・支援等における専門性を向上させ、教員の力量アップにつなげる。

2　取組方法

方法は以下の図の通りである。

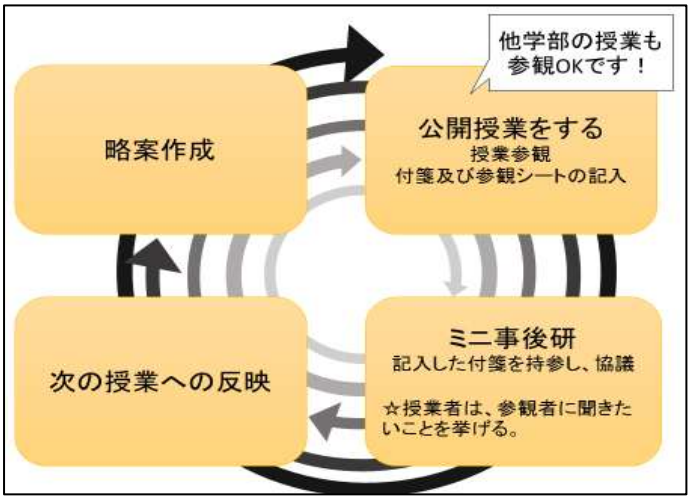


図　公開授業の方法

指導案については細案ではなく、普段作成している略案を用いた。指導案を書くという負担を軽くし、かつ授業参観を畏まったものではなく気軽にできるものだとイメージしてもらえるようにした。また、参観しやすいよう参観希望を集約し、参観体制が取れるよう調整した。

事後研については、中心指導者の主訴を中心に参観者と協議することで、T1にとって有益であり、協議の目的(ゴール)に向かって全員で取り組める公開授業となるように工夫した。協議には、授業に関するコメントを記した付箋を用いて自分で書いた意見に責任を持ち、授業者と参観者が主体的に参加し学び合えるようにした。

公開授業は全学部で 11 回行った。

成果としては、

・T1の主訴を中心に協議することで授業を深められた。

・参観希望用紙を配布して参観体制を調整することにより、参観しやすくなり、どの授業が行われているかわかりやすかった。

・付箋を用いて事後研を進めるスタイルがわかりやすく、意見を活発に交換できた。

・他学部の授業を見に行くきっかけになり、貴重な勉強の機会になった。

ということがあった。

公開授業の目的としていた、教員の授業力や専門性の向上を支える機会となり一定目的は達成されたと言える。

一方で、課題として挙がってきたのは以下のとおりである。

・他の会議と重なり事後研を行う時間を設定しにくく、かつ参加しにくい。

・児童生徒の実態によっては学級を抜けることができない。

・行事等が重なり参観が難しい。

公開授業を参観したり事後研にも参加したい意欲があるのだが、それを満たすことができない状況にあることが課題である。

次年度以降はその課題を解消して、本校教員の授業について学びたい意欲を児童生徒の力につなげていきたい。そのための場として、公開授業を継続していきたいと考えている。

参観できるような指導体制を取ることについては、児童生徒の学びが保障されるようできる限り調整していくが、少ない指導体制であるからこそ児童生徒の主体的な学びが促進される機会だととらえることも必要だと考える。児童生徒の安全と学びを保障しつつ、必要最小限の指導体制で指導を行うことのメリットを今後共通理解できるように促していきたい。

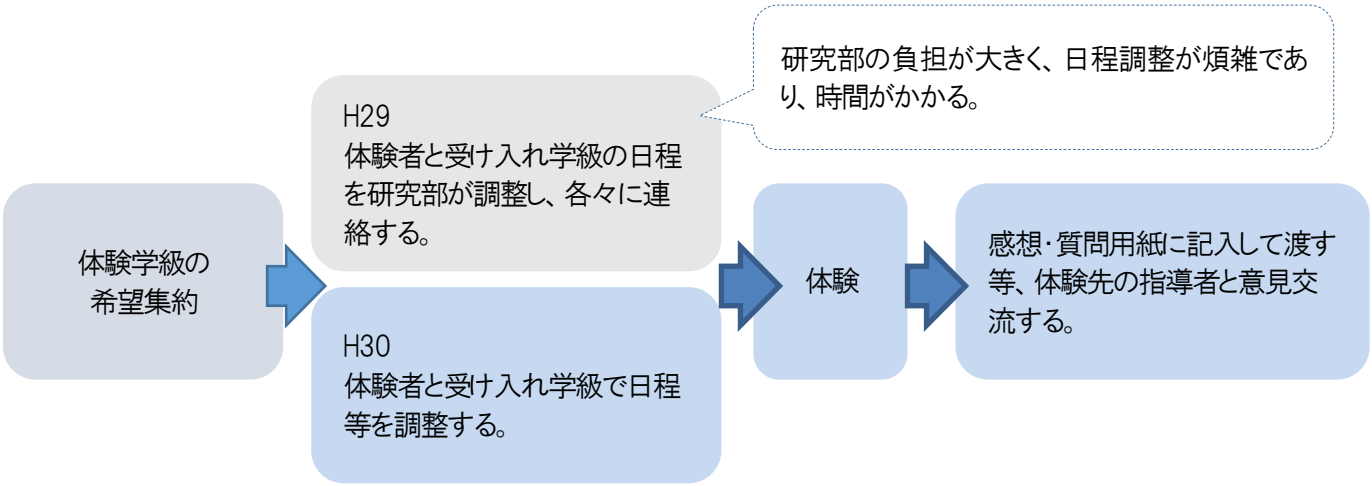
また、事後研については一堂に会して直接やりとりすることを基本に、参加できない者は感想等を文面で伝える方法や他の会議設定とのバランスを考えながら調整したい。

○ 指導者他学級体験

1　目的

・他学級や他学部の授業にTTとして参加し、授業の様子を知る。
・授業について意見交流し、授業づくりや指導に生かす。

2　取組方法



3　様子

・H29 年度は 65 名、H30 年度は50名の職員が他学級体験を実施した。
・担任している学級と同じ発達段階の他学部の学級やグループでの体験を希望する職員や、知的重度学級の担任が知的軽度の学級での体験を希望するなど、それぞれに目的を持って体験していた。

4　成果と課題

成果

・参加集約をしたほとんどの職員が体験をすることができた。
・当事者同士で日程調整をすることでスムーズに進んだ。
・事前に打ち合わせをすることでスムーズに児童生徒と関わり、支援を行うことができた。
・子どもの様子や授業等で気になった疑問を伝えてられたおかげで自分では気づかなかったことに気づけてよかった。
・感想用紙を活用した意見交流ができた。
・児童生徒にとっても、様々な指導者と交流する機会となった。

課題

・2学期は学校行事が多く体験をすることが難しく、3学期当初に日程が集中した。
・高等部職員の体験希望はあったものの、実施できたものが少なかった。
・12 年間の系統性を考える良い機会なので、今後はその視点も含めて取り組んでいきたい。

○ 研究のまとめ

2 年間の研究活動、そして各学部の研究活動を通して以下のことが明らかになった。

教科別の指導と各教科等を合わせた指導との関連を整理し、学習内容に関連性を持たせることにより、児童生徒がより自分の力を発揮したり主体的に学ぶ姿を身につけたりすることができる（主体的に学ぶことができる）。

より「主体的に学ぶ児童生徒」を目指した教育課程の改善を行うことができる。

研究の1年次においては、どの学部も教科別の指導と各教科等を合わせた指導との間にどのような関連があるのかを明確に示し、整理することができた。そうすることで、児童生徒が「何を学ぶのか」「何のために学ぶのか」ということが教員間で共通理解でき、年間の指導計画を有効に活用することが重要であると確認することができた。

また、「児童生徒の学ぶ目的」を共通理解することで、教員同士が同じ目線で指導支援にあたることにつながり、児童生徒がより学びやすくなる環境を整えることができた。教員間で話し合うことで学習環境や指導支援についての理解が深まり、実践を通して児童生徒が主体的に学ぼうとする姿につながったと言えるだろう。

研究の核となる「主体的に学ぶ児童生徒の姿」を担任間やグループ間で協議し、明確にすることでそれを目指した授業づくりが行われたことも成果である。教育活動の目的となる「主体的に学ぶ児童生徒の姿」を共有し、それに向かって授業づくりを行うことで学習環境が整い、児童生徒がより意欲的に学習に取り組む姿がみられた。そして、授業づくりを行う中で年間の指導計画や単元配列、各授業の関連を大切にした視点を持てたことは、より「主体的に学ぶ児童生徒」を目指した教育課程の改善につながった。日々の実践の交流や見直し、担任・グループ間で話し合うことで育みたい児童生徒の姿を共有しながら教育課程の改善、発展につなげることができた。

今後はこの2年間の研究による成果を生かし、「主体的に学ぶ児童生徒の姿」を共有し、児童生徒が主体的に学び続けていけるよう、年間指導計画や単元、学習活動に対する評価を行いながら児童生徒の学びに合った、更なる教育課程の改善・発展に取り組んでいきたい。そして、それらのことが教員間の共通理解事項として根付くことを目指し、教育活動を更に充実・発展させていきたい。

京都府立舞鶴支援学校

〒624－0812　京都府舞鶴市字堀4－1
TEL(0773)78－3133　FAX(0773)78－3135
メールアドレス：maizuru-s@kyoto-be.ne.jp